

# LGBT 体験語る

## 北区内でポ 周囲や職場への要望訴え

性的少数者（LGBTなど）を知り、誰もが生きやすい社会のあり方を考える啓発シンポジウム「虹の橋をかけよう（多様なセクシユアリティ）」が北区であった。心と体の性が異なる性別違和や同性愛などの当事者が体験を語り、周囲の人や学校、職場などに望むことを訴えた。

GID（性同一性障害）学会の理事長を務める中塚幹也・岡山大教授が講演。性的少数者の定義を説明し、「体や心、好きになる性、服装などは多様」と語った。日本が性的少数者が自身のことを公に



性的少数者の当事者らの話に耳を傾けるシンポジウムの参加者―北区表町3のさんかくウイで

できる社会かとの問題提起をし、「正しい知識を持ち、考えてほしい」と述べた。

性的少数者に関係する法律制度についても紹介し、「戸籍の性別を変更するには、性同一性障害特例法で、未成年の子どもを持っていないことや、精巣や卵巣を摘出するなどの「性別適合手術」が必要とされる現状に触れ、「人権上の問題がある」と指摘した。

その後のパネルディスカッションには、同性愛や性別違和の当事者4人が登壇。中塚教授と光本順・岡山大准教授も加わり、性別違和などを感じ始めた時期と当時の心情▽家族との関係▽学校に望む

こと▽結婚や子育て―などのテーマで意見を交わした。

女性の体に違和感があったという大学院生、金平（かねひら）くんはいさん（24）＝仮名＝は、大学3年時に就職活動で女性用スーツを着た時に「づらい思いをした経験

を明かした。大学院に進んで「自分らしく生きる」と決意し、今月には就職先が決まったといい、「自分とは何か、自問を重ねた経験が就職活動で役立った」と語った。

シンポは、岡山市が定めた男女共同参画推進週間（21～27日）に行う「さんかくウイーク」の開募企画で、約170人が参加した。

【久木田照子】